

第1章 「めざす子どもの姿」



1 四日市市が進める教育の基本的な考え方

1 四日市市教育大綱 ～5つの理念～

四日市市教育大綱（平成27年11月策定）は、総合教育会議の協議を経て基本的な5つの理念を示したものです。本市総合計画の基本目標5を「教育大綱」の方針として、また、本市学校教育ビジョンを「教育大綱」の5つの理念を実現するための具体的な施策として位置付けています。

- 1 社会人になっても通用する問題解決能力の養成
- 2 豊かな人間性と健やかな体の育成
- 3 夢や志の実現に向け、自ら学び続ける意欲・態度の涵養
- 4 家庭、地域、学校・行政が連携・協働した教育の実現
- 5 都市の特長を生かした四日市ならではの教育の推進



四日市市教育大綱

2 第2次四日市市学校教育ビジョンの基本的な考え方

◆ 基本理念

「生きる力」「共に生きる力」をはぐくむ

平成23年度からスタートした「第2次四日市市学校教育ビジョン」の取り組みも5年が経過し、最終年度となりました。本ビジョンでは「生きる力」「共に生きる力」をはぐくむ基本理念のもと、将来の四日市市を担う人材の育成に継続的に努めてきました。

◆ めざす子どもの姿を実現していくための3つの視点

子どもの姿から導き出された課題について、3つの視点から整理し、常にそれらを意識した取り組みを進めています。

段差のない教育

子どもの成長や発達に応じた指導方法の工夫や体制の整備を図り、より滑らかに接続できるよう努め、幼保小中の学びや育ちの連続性を大切にする教育を進めます。

途切れのない支援

特別な支援を必要とする子ども、いじめ・不登校に悩む子ども、問題行動を起こす子ども、外国人幼児児童生徒等に対し、学校区・園が関係機関や家庭・地域との連携を広げながら、ネットワークを構築し、乳幼児期から就労に至るまで途切れることなく、必要な相談や支援をきめ細かく行うことができる体制づくりに努めます。

家庭・地域との協働

学校・家庭・地域のそれぞれが担う役割と責任を果たしながら「地域とともに作る学校」の実現をめざし、学校と家庭・地域との協働をより進めていきます。

◆ めざす子どもの姿

輝く よっかいちの子ども

「生きる力」としての「問題解決能力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」、そして、本市が大切にしている「共に生きる力」としての「豊かな人間関係をはぐくむためのコミュニケーション力」を育成することにより、それぞれ実現したい子どもの姿を次のように示します。

1 将来、社会人として生きるために必要な問題解決能力を身につけた子ども

各教科の基礎的・基本的な内容を身につけ、自分の考えをもち、自分で判断し、表現できる力や学習に取り組む意欲を高め、さまざまな問題に主体的に対応し、解決していこうとする資質や能力が向上しています。

2 自らを律しつつ、他者とともに協調し、人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性を備えた子ども

自然体験・社会体験・生活体験や文化的な活動に積極的に参加し、豊かな人権感覚や規範意識を身につけ、将来において社会的に自己実現ができる資質や能力が向上しています。

3 自他の健康・安全について実践していく力やたくましく生きるための体力を備えた子ども

仲間と関わりながら進んで運動に取り組み、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質や能力とともに、自他の健康や安全について考えるなど、健康・安全を適切に管理し、改善していくための実践力やたくましく生きるための体力が向上しています。

4 他者の意見を聴き、自分の思いを伝える力を身につけ、互いに尊重し、共に向上する人間関係を築くための資質を備えた子ども

聴く力・話す力、自分と他者との関わりの中で行動できる力（社会性）が向上しています。また、他者を認め、互いに尊重し、共に向上しようとする意識をもって行動し、学習集団や生活集団、自主的・主体的活動集団の質が向上しています。

これらの力を兼ね備え、将来においても、自己の個性を生かし、他者とともに協調し、主体的に社会にかかわろうとする社会人として成長していくことができる資質や能力を身につけた、本市のめざす子どもの姿を「**輝く よっかいちの子ども**」として示します。



2 重点目標の達成に向けた取り組み

◆ 重点目標の達成状況

重点目標の達成状況を把握するため、それぞれの重点目標に成果指標を設定し、その進捗状況を把握しています。

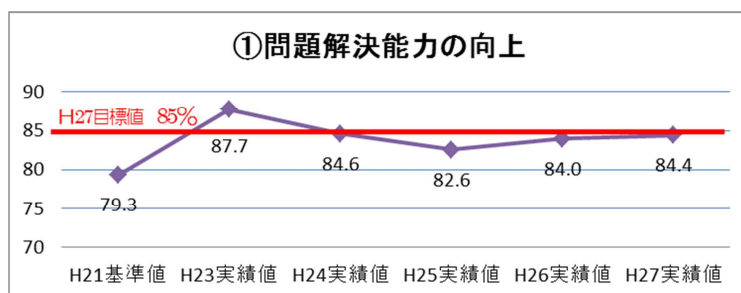
No.	重点目標	成果指標	実績値 平成 27 年度	目標値 平成 27 年度
①	<u>問題解決能力の向上</u> 基礎学力の定着を図り、学ぶ意欲を はぐくむことにより、問題を解決する 力を育成するとともに、社会の中で共 に生きる実践的な態度や資質を育成 します。	児童生徒アンケート※1 「授業で学習したことは、将来 の役に立つと思う」（4段階評 価）において「そう思う」「ま あそう思う」と回答する割合	84.4%	85%
②	<u>豊かな人間性の育成</u> さまざまな学習活動や生活体験を 通して、基本的生活習慣や規範意識、 自尊感情や感動する心、他者と協調 し、他者を思いやる心など、豊かな人 間性をはぐくみます。	児童生徒アンケート※1 「自分には、よいところがある と思うか」（4段階評価）にお いて「よく思う」「時々思う」 と回答する割合	73.2%	80%
③	<u>健康や体力をはぐくむ教育の充実</u> 自他の健康・安全について実践して いく力や体力の向上を図り、生涯にわ たって運動・スポーツに親しみ、明る く豊かな生活を営む態度や資質を育 成します。	児童生徒（抽出）の体力テスト 総合評価（5段階）で3段階以 上の児童生徒の割合	74.2%	75%
④	<u>特別支援教育の充実</u> 一人一人の教育的ニーズを把握し、 生活や学習上の困難を改善する適切 な指導や必要な支援を行い、自立し 社会参加するための基礎となる力を育 成します。	保護者アンケート 「障害のある子どももいない子 どもも、自分の力を発揮して学 習や様々な活動に参加してい るか」（4段階評価）において 「そう思う」「まあそう思う」 と回答する割合	87.3%	85%
⑤	<u>就学前教育の充実</u> 生涯にわたる人間形成の基礎を培 う重要な時期であることから、「生き る力」「共に生きる力」の基礎となる 力を育成します。	保護者アンケート 「お子さんは登園を喜んでい る」「園の生活や遊びが楽しい と言っている」（4段階評価） において「そう思う」と評価す る割合	82.5%	85%
⑥	<u>時代の変化に対応する教育の推進</u> 時代の変化により生ずる課題に対 し、自ら新しい知識や情報を得て、社 会の変化の中を主体的に生きていく 力を育成します。	児童生徒アンケート※1 「将来の夢や目標を持ってい るか」（4段階評価）において 「そう思う」「まあそう思う」 と回答する割合	77.8%	85%
⑦	<u>家庭・地域との協働の推進</u> 保護者・地域住民が学校づくりに主 体的に参画する「地域とともに作る 学校」の実現をめざすとともに、家 庭・地域の教育力の向上の支援に努め ます。	市政アンケート※2 「家庭・地域の教育との連携」 （5段階評価）において「非常 に満足している」「満足してい る」と回答する割合	16.1%	12%
⑧	<u>教職員の資質・能力の向上</u> 教育への情熱を持ち、豊かな人間性 を備え、自己相互研鑽を積み、確かな 教師力を持った教職員をめざします。	児童生徒アンケート※1 「授業は、分かりやすいか」（4 段階評価）において「よく分か る」「分かる」と回答する割合	78.6%	80%

※1 平成27年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙の集計データより

※2 市政アンケート…毎年実施の市内居住20歳以上の市民5,000人（無作為抽出）へのアンケート

重点①「問題解決能力の向上」

では、「授業で学習したことは将来の役に立つ」との問いに対し「そう思う」「ややそう思う」と回答した子どもの割合が、昨年度比で0.4ポイント上昇の84.4%となり、最終目標値85.0%とほぼ同水準に達しました。



この成果指標については、問題解決能力を向上させるには、基礎学力の定着を図り、学ぶ意欲をはぐくむとともに、社会の中で共に生きる実践的な態度や資質を育成することが大切な要素であると考え、児童・生徒の学習意欲や目的意識を成果として評価するよう設定したものです。

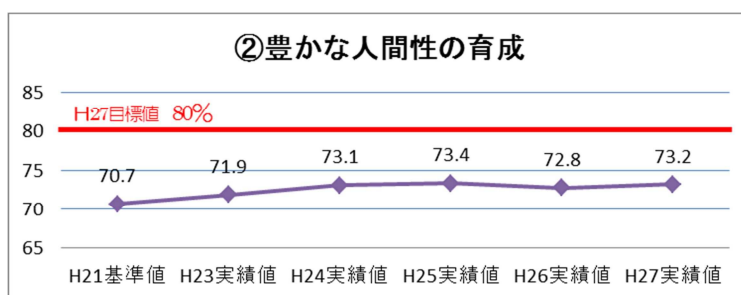
本市では『問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック』を活用した授業改善に取り組んでいます。実践研究推進校を指定して市域の学校に向けて授業公開を行ったり、授業づくりに関する教員向けのリーフレットを作成・配付するなどの取り組みを行ってきました。各校では、ガイドブックに示された『四日市モデル（5つのプロセスに分けた授業モデル）』に基づき、将来における実生活や社会と学習した知識とを関連づけるように意識した授業づくりを進めており、その成果が子どもの着実な歩みとなって表れていると思われます。

次年度から始まる第3次四日市市学校教育ビジョンにおいては、学ぶことと社会とのつながりを意識しながら、主体的な学習意欲を持つことを大切にしていきます。

今後も、実生活や社会と結びつくような学習課題の一層の工夫を図ることで、子どもたちの興味・関心や学習意欲を喚起し、社会人になっても通用する問題解決能力の基盤を身に付けさせることを目指していきます。

重点②「豊かな人間性の育成」

については、「自分には、よいところがあると思うか」との問いに対し「そう思う」「ややそう思う」と回答した子どもの割合が、昨年度と比較して0.4ポイントの上昇の73.2%となりました。



この4年ほどは、ほぼ横ばいの結果となっており、最終目標値である80.0%は達成しませんでした。

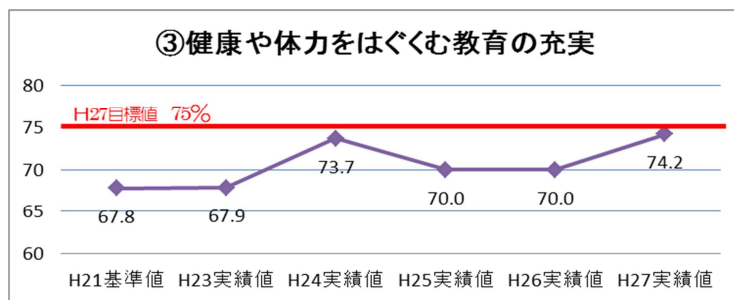
豊かな人間性を育成するためには、生徒指導・教育相談をはじめ、道徳教育、人権教育、読書活動などの施策を総合的・調和的に推進することを重視しています。

また、学校だけでなく、家庭や地域との協働により、豊かな学習環境や体験活動の

機会を設けることも、大切な要素となります。

今後も、基本的な生活習慣や規範意識を身につけ、他者と協調し、安心した学校生活を送ることができるような環境を整えるとともに、子どもたちの自己肯定感が高まるような活動を充実させていくことを目指します。

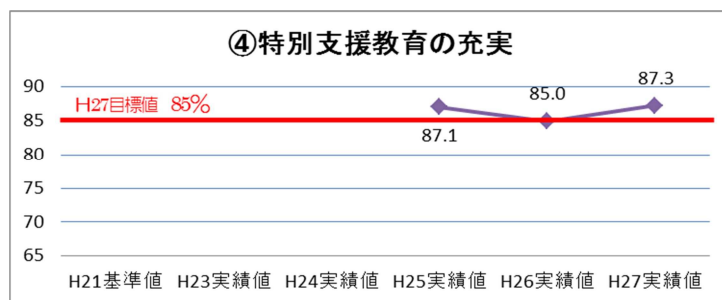
重点③「健康や体力を育む教育の充実」については、小学校5年生と中学校2年生に実施した8種類の体力調査の合計点を5段階（A～E）に分けたときの上位3段階（A～C）の割合を指標としています。



本年度は、昨年度比 4.2 ポイント上昇の 74.2%と大きな伸びが見られ、目標値の 75%をほぼ達成する結果となりました。特に小学校5年生女子と中学校2年生男子において、顕著な上昇が見られました。

本市では、体育科・保健体育科の授業の初めに行う「5分間運動」の取り組みをはじめ、子どもの運動量と質の確保に努めています。また、体力調査の結果をもとに、「つきたい力」を明確にした授業を展開することを目指しています。これらの取り組みや、体育指導の質と深まりが、子どもたちの運動への意欲と体力の向上につながった成果であるといえます。今後は、体育科・保健体育科の授業の一層の充実を図るとともに、休み時間や業間、放課後等に、子どもが体を動かす機会を拡充し、自ら主体的に運動に取り組めるよう、環境整備を図っていきます。

重点④「特別支援教育の充実」については、昨年度に比べ、2.3 ポイントの上昇が見られ、最終目標値の 85%を達成しました。



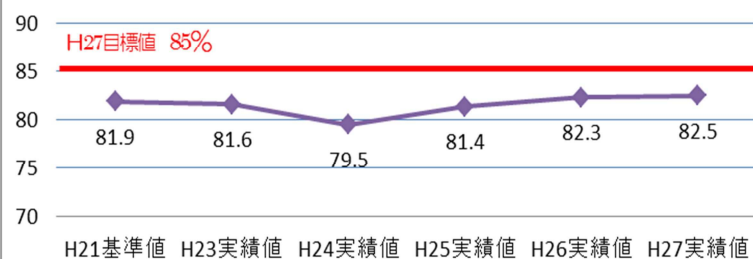
本市では、校・園内特別支援教育の推進体制の充実とともに、教育委員会が、こども未来部、健康福祉部と連携し、早期から一貫した教育支援システムを構築してきました。今後とも、一人一人の教育的ニーズや保護者の考えに応じた適切な指導・支援が行えるよう、合理的配慮についての研修を進めていきます。

重点⑤「就学前教育の充実」

については、昨年度に比べ 0.3 ポイント上昇しました。「お子さんは登園を喜んでいますか」「園の生活や遊びが楽しいと言っていますか」との問いに対し、「そう思う」と肯定回答する保護者の割合が、徐々に増加していることがわかります。

本市の幼稚園では、遊びを通した体験が、その後の生きる力へつながることを重視しています。幼児の遊びを充実させるため、年齢や発達課題に応じた環境構成を行い、幼児の特性に応じた指導の工夫を行っています。さらに、遊びを通した学びの充実を目指し、公開保育を積極的に取り入れ、教職員の研修を深めています。

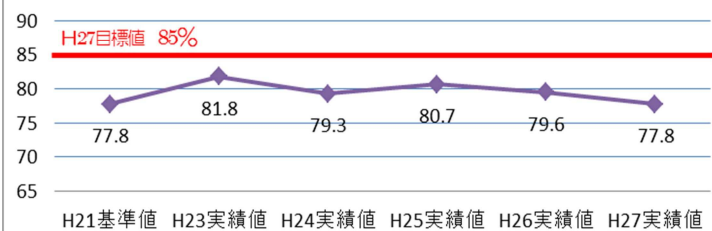
このような取り組みに加え、園のHP等を活用した積極的な情報提供により、子どもも保護者も安心して楽しく過ごせる教育環境をつくっていることが、これらの成果につながっているとと言えます。

⑤就学前教育の充実

重点⑥「時代の変化に対応する教育の推進」では、「将来の夢や目標を持っているか」との問いに対し「そう思う」「ややそう思う」と回答した子どもの割合が、昨年度比で 1.8 ポイント下回りました。

この項目については、徐々に下降する傾向が見られ、これは全国平均においても同様の結果となっており、将来の展望の不透明さや職業観の変化など、社会情勢の影響を受けているものと思われます。

本市では、平成25年度より、就学前～小・中学校までの子どもの成長を見通したキャリア教育に関する指導計画が作成され、それをもとに社会の変化に対応し、主体的に生きていく力を育成するキャリア教育の取り組みが定着しつつあります。今後も、学校で学ぶことと社会とのつながりを意識しながら、将来の生き方や社会における自らの役割を考えさせる教育を進めていきます。

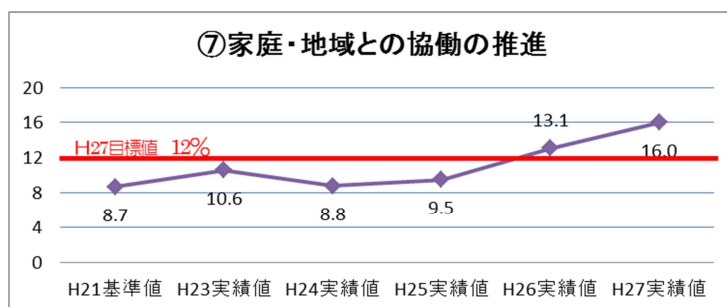
⑥時代の変化に対応する教育の推進

重点⑦「家庭・地域との協働の推進」については、成果指標となる市政アンケートの数値が平成26年度から目標値を上回り、27年度はさらに上昇しています。

「四日市版コミュニティスクール」

の指定校は20校となり、この5年間では平成23年度の8校から12校増えています。その他の学校・園に設置する「学校づくり協力者会議」とともに、その取り組みの充実が成果につながってきたものと考えられます。また、各校において原則月1回程度実施している「土曜日を活用した教育活動（土曜授業）」も、家庭や地域が学校に主体的にかかわるよい機会となっています。

今後も、地域に開かれた学校、地域とともにつくる学校を目指し、家庭・地域とともに子どもを育む取り組みを進めていきます。



重点⑧「教職員の資質・能力の向上」では、「授業はわかりやすいか」との問いに対し「そう思う」「ややそう思う」と回答した子どもの割合が、昨年度と比較して2.3ポイントの上昇となりました。

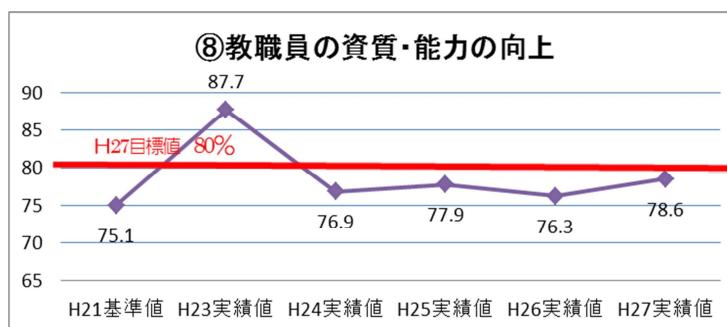
学力向上の取り組みや「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック」による授業改善など、組織的に取り組む教職員研修が一定の効果をあげ、

わかる授業づくりにつながってきたと考えます。

一方、ベテラン教員が退職し若手教員の割合が大きくなる中で、学校におけるOJTを活用した人材育成が急務となっています。

現在、各学校では、ベテラン教員が講師となり、授業における課題の提示方法や指導方法等の工夫・改善、学級づくりなどをテーマにしたミニ研修会が活発に行われるようになりました。また、若手教員を対象にした市主催研修「若手塾」において、わかりやすい授業づくりなど、授業実践を主軸に据えた研修を充実させています。

今後も教職員の年齢構成は大きく変化することが見込まれるため、従来型のライフステージ別研修などの充実を図るとともに、小中学校が連携し、中学校区を一つの単位とした教職員研修の充実が求められます。



3 データから見える子どもの姿

平成27年度に全小中学校において実施した「全国学力・学習状況調査」のデータからは、子どもの学力の状況とともに、学習を取り巻く環境が見えてきます。本調査結果のデータに基づき、四日市市の子どもの姿を分析しました。

1 本市の学力の状況（平成27年度全国学力・学習状況調査の分析から）

○小学校

平成27年度の本市の各教科の平均正答率は、国語のA及びB問題、算数のA及びB問題、理科で三重県平均及び全国平均を下回りました。

小学校		国語		算数		理科
		A (知識)	B (活用)	A (知識)	B (活用)	
平成19年度	本市	81.7	62	81.6	62.1	
	三重県	80.6	60	81.1	61.4	
	全国（公立）	81.7	62	82.1	63.6	
平成20年度	本市	64.1	47.8	71	50.1	
	三重県	62.9	47.1	70.9	49.7	
	全国（公立）	65.4	50.5	72.2	51.6	
平成21年度	本市	68.4	46.8	76	53.1	
	三重県	67.8	46.9	76	52.5	
	全国（公立）	69.9	50.5	78.7	54.8	
平成22年度 抽出校：40校中、12校参加	本市	81.9	74.3	71.8	47	
	三重県	81.7	75.2	72.4	47.3	
	全国（公立）	83.3	77.8	74.2	49.3	
平成24年度	本市	79.1	51.4	72.6	56.1	58.1
	三重県	79.6	52.7	72.2	56.8	58
	全国（公立）	81.6	55.6	73.3	58.9	60.9
平成25年度	本市	60.7	47.5	76	55.8	
	三重県	60.3	46.7	75.8	55.3	
	全国（公立）	62.7	49.4	77.2	58.4	
平成26年度	本市	69.7	53.6	76.7	56.7	
	三重県	69.6	52.5	76.2	56	
	全国（公立）	72.9	55.5	78.1	58.2	
平成27年度	本市	67.3	64.2	74.1	43.4	59.1
	三重県	68	65.3	74.8	44.1	59.2
	全国（公立）	70	65.4	75.2	45	60.8

※平成23年度は東日本大震災のため、実施されていません。

次の表は全国平均正答率を100として比較したものです。平成26年度と比較すると、算数Bが97.4から96.4に下がったことを除けば、全国との差は縮まっています。

また、各教科を設問ごとに分析すると、国語では漢字や語句の知識の定着が不十分であること、算数では根拠となる事柄や理由を説明することが苦手であることが課題であるとわかります。これらは、学習の進め方の工夫によって改善できる内容であることから、今後の授業改善や、家庭学習のさらなる充実を進めていきます。

全国平均正答率を 100とした場合		国語		算数		理科
		A（知識）	B（活用）	A（知識）	B（活用）	
四日市市	H25	96.8	96.2	98.4	95.5	(H24)
	H26	95.6	96.6	98.2	97.4	95.4
	H27	96.1	98.2	98.5	96.4	97.2

○中学校

平成27年度の本市の各教科の平均正答率は、国語のA及びB問題では全国平均並みですが、三重県平均は上回りました。また、数学のA問題及びB問題では、全国平均及び三重県平均を大きく上回るとともに、理科でも全国平均及び三重県平均を上回りました。

中学校		国語		数学		理科
		A（知識）	B（活用）	A（知識）	B（活用）	
平成19年度	本市	82.2	73	76.1	64.1	
	三重県	81.6	71	73.1	60.6	
	全国（公立）	81.6	72	71.9	60.6	
平成20年度	本市	73.3	60	65	50.7	
	三重県	72.6	59.4	63.7	49.3	
	全国（公立）	73.6	60.8	63.1	49.2	
平成21年度	本市	76.4	74.4	64.3	58	
	三重県	75.9	73.3	62.7	56.5	
	全国（公立）	77	74.5	62.7	56.9	
平成22年度 抽出校：22校中、10校参加	本市	76.1	66	68.5	45.8	
	三重県	74.1	64.1	65.4	42.8	
	全国（公立）	75.1	65.3	64.6	43.3	
平成24年度	本市	75.8	63.5	64	49.5	52.2
	三重県	74	61.1	61.6	48	50.6
	全国（公立）	75.1	63.3	62.1	49.3	51
平成25年度	本市	75.9	66.6	64.5	40.6	
	三重県	75	65.8	63.2	39.3	
	全国（公立）	76.4	67.4	63.7	41.5	
平成26年度	本市	79.9	51.3	69.9	60.5	
	三重県	78	49	67.1	58.3	
	全国（公立）	79.4	51	67.4	59.8	
平成27年度	本市	75.8	65.4	66.2	43.5	53.6
	三重県	75	64.3	64.3	40.6	51.9
	全国（公立）	75.8	65.8	64.4	41.6	53

中学校の正答率は、国語・数学ともに、全国平均正答率を毎年ほぼ上回る傾向にあります。平成27年度は国語Bが0.4ポイント下回りましたが、国語A、数学A・B、理科ともに全国平均を上回りました。特に数学A・Bは8年間連続で全国平均を上回り続けており、本市の強みとなっています。

下の表は、全国平均正答率を100として、平成27年度の中学3年生の正答率を小学6年生当時（平成24年度）のデータと比較したものです。平成24年度は国語、算数、理科ともに全国平均を下回っていることから、それ以降の3年間で順調に学力が伸びていると判断できます。

各教科を設問ごとに分析すると、基礎的な知識の習得については、やや満足できますが、既存の知識を生かして、条件に合わせて作文したり、数量関係を文字式で表したりするといった応用的な学習活動に弱みが見られます。

全国平均正答率を 100とした場合		国語		算数(小)・数学(中)		理科
		A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)	
四日市市	H24(小6)	96.9	92.4	99.0	95.2	95.4
	H27(中3)	100	99.4	102.8	104.6	101.1

本市の小中学校では、平成25年度から本調査の趣旨等を踏まえた授業改善に積極的に取り組むとともに、本調査問題を活用した授業を行ったり、学力補充の取り組みを充実させたりするなど、『学力向上についての4つの取り組み』（P.33参照）を提示し、学力向上についての重点的な取り組みを継続しています。

本年度の調査で明らかになった子どものつまずき等を分析するとともに、授業改善のポイントなど具体的な方策を立てて、課題の克服に向けた授業改善を進めます。

○「確かな学力」の定着に向けた家庭学習の取り組み

全国学力・学習状況調査では、児童・生徒質問紙による家庭での学習の状況調査や、学校質問紙による学校の取り組み調査も実施しています。

本年度の調査では、自分で計画を立てて家庭学習を行っている子どもの割合（質問1）は、小中学校ともに全国平均とほぼ同等でしたが、依然として約半数の子どもたちが、家で計画を立てて勉強を「あまりしていない」「していない」と答えています。

質問1 家で、自分で計画を立てて勉強していますか

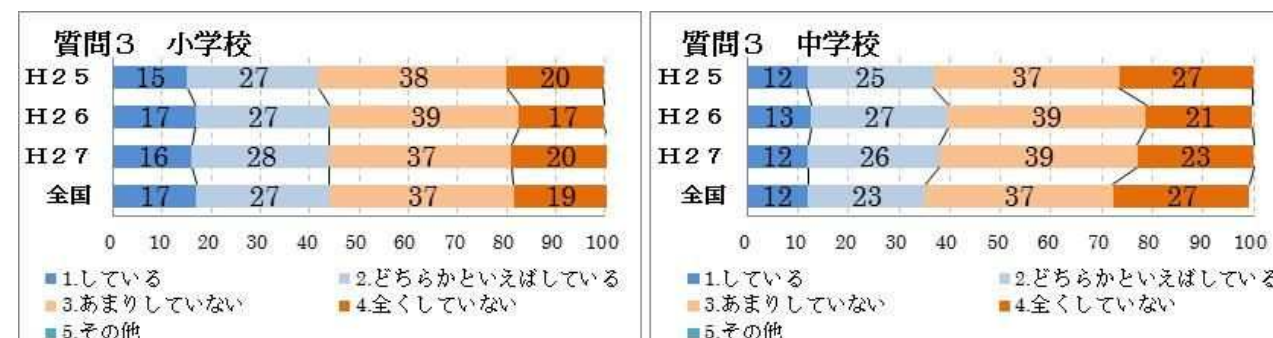


学校の宿題や予習・復習などの家庭学習を行っている子どもの割合（質問2～4）は、小中学校ともに全国平均並みでした。中学校において予習をしている生徒の割合は全国平均をやや上回っている一方で、小学校では全国平均を下回っています。家庭学習の習慣が定着する子どもの割合は、年々増加傾向にありますが、与えられた課題以外の予習・復習などを行う子どもは約半数程度に留まっています。

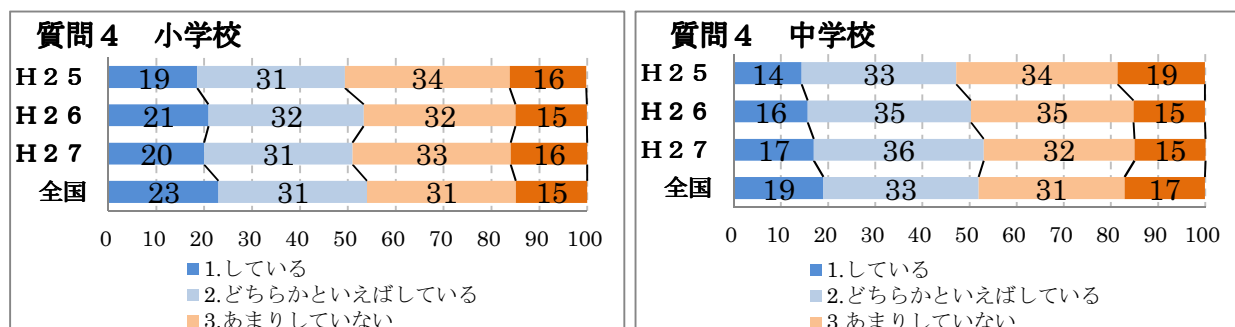
質問2 家で、学校の宿題をしていますか



質問3 家で、学校の授業の予習をしていますか



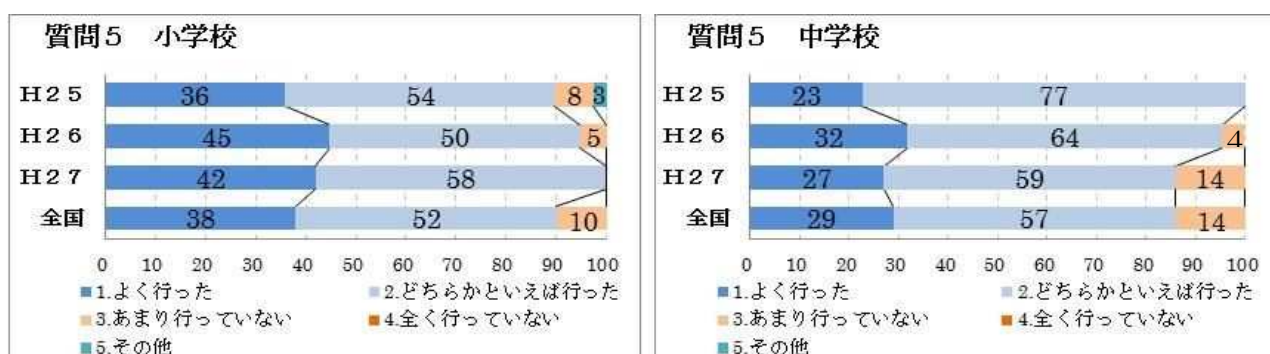
質問4 家で、学校の授業の復習をしていますか



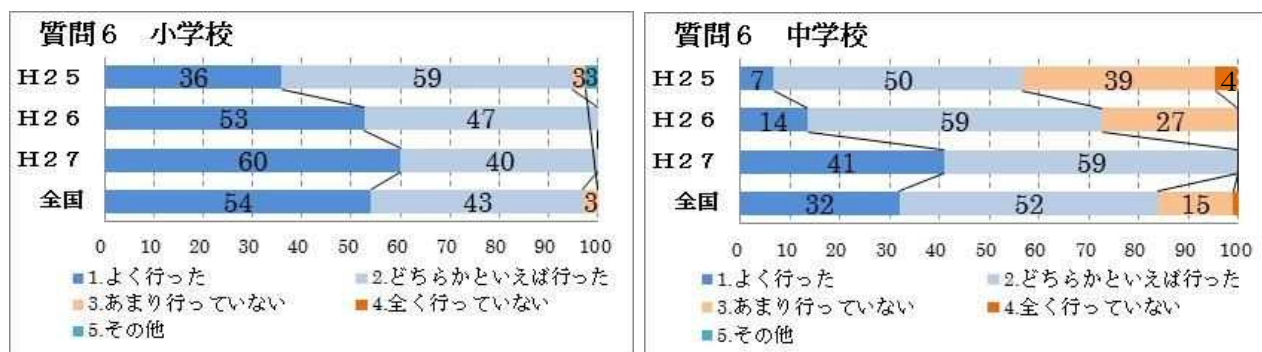
また、小中学校の取り組みに目を向けると、家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えた学校の割合（質問5）は全国平均を上回っています。さらに、保護者に家庭学習を促す働きかけをしている割合（質問6）は小中学校ともに100%となっています。

小中学校が、家庭学習の定着を目指して具体的な手立てを講じた結果、家庭学習に取り組む子どもが着実に増えていることがわかります。

質問5 家庭での学習方法等を、具体例を挙げながら教えましたか



質問6 保護者に家庭学習を促すような働きかけをしましたか



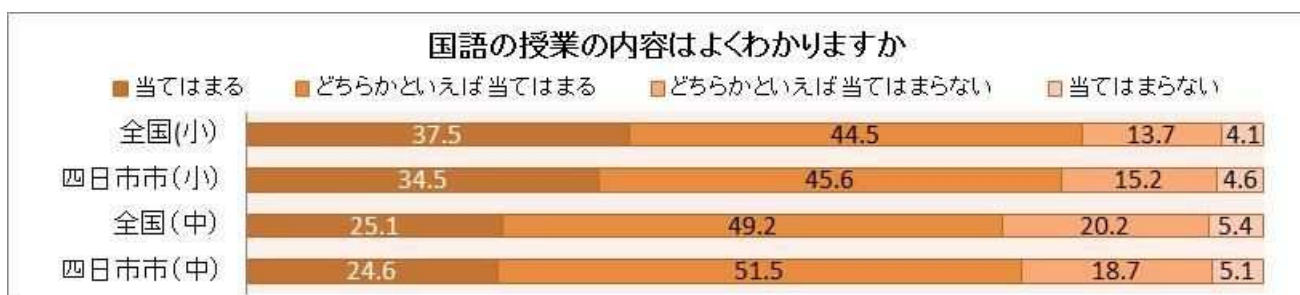
2 問題解決能力の向上

以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「問題解決能力を身につけた子ども」に関する質問に対して、平成 27 年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校 6 年生・中学校 3 年生）における児童生徒質問紙の回答状況を全国平均と比較したものです。

「授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」の問いに対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもの割合は、小学校で 89.5%（全国平均 89.5%）、中学校で 79.3%（全国平均 78.4%）となっています。小学校は全国平均と同じ、中学校は約 1.0 ポイント高くなっています。



また、「授業の内容はよくわかりますか」との問いに対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもの割合は、小学校においては、国語で全国平均よりやや低く、算数では全国平均と同程度、本年度実施された理科においては全国平均よりやや高くなっております。また、中学校においては、国語、数学、理科とも全国平均より高い傾向となっています。





「授業の中でわからないことがあったらどうすることが多いですか」との問いに対しては、「先生や友達、家の人に尋ねて解決する」という回答が、小学校では約83%、中学校では約80%となっており、小学校では全国平均と同程度、中学校では全国平均よりも高くなっています。

さらに、小中学校ともに、約10%の子どもが「自分で調べる」と答えています。疑問や課題をそのままにせず、他人に尋ねたり、調べ学習をしたりして、多様な方法により解決することは、問題解決能力の向上につながります。

一方、小中学校とも約6%の子どもが「そのままにしておく」と答えています。確かな学力の定着に向け、すべての子どもに対するきめ細かい対応が、より一層求められます。



「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くことは難しいですか」との問いに対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した子どもが、小学校で65.0%（全国平均60.1%）、中学校で64.6%（全国平均64.4%）となっています。特に小学校において、全国平均より高い割合となっており、長文を書くことに苦手意識を持っている子どもが多いことがわかります。



一方、「授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいですか」との問いに対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した子どもが、小学校で 55.7%（全国平均 55.2%）、中学校で 63.5%（全国平均 64.4%）でした。中学校においては、自分の考えを表現することを苦手と感じている子どもが、全国平均と比べて少ないことがわかります。



また、「友達の間で、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」との問いに対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した子どもが、小学校で 63.2%（全国平均 66.9%）、中学校で 65.6%（全国平均 62.9%）あり、小学校において全国平均よりやや低く、中学校においては全国平均よりやや高い結果となっています。



自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることを難しいと感じている子どもが6割程度いるものの、話し合う活動を通して、友達との間で考えを深めたり共有したりすることができる子どもも6割程度おり、例年この傾向が続いています。

話し合う活動の前には、文章を用いて考えをノートにまとめる作業を取り入れるなど、授業の中に「書く」活動を多く取り入れ、長文を書くことへの抵抗感をなくして自信につなげる工夫が必要です。

※ 問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック（P.40参照）

本市では、子どもたちの問題解決能力の向上を目指し、「問題解決能力向上のための5つのプロセス（四日市モデル）」に基づいて、授業に工夫を凝らしています。授業の中では、自分の考えを説明したり、文章で表現したり、それらを発表したりする活動を多く取り入れています。



子どもたちが持つ既有的知識・技能を活用して、問題を理解し、解決方法を導きだし、熟考するというプロセスの中で、子どもたちの問題解決能力の向上を図っています。これらの授業では、一人一人の児童生徒が考えたことを説明したり、問題ととらえたことを共に考えあって解決したりしています。今後は、さらに、授業で学んだことを日常生活で活用するなどの経験により、学ぶことに対する有効性を実感させていく必要があります。

3 豊かな人間性

本市では、豊かな人権感覚や規範意識を身につけ、将来において社会的に自己実現ができるような子どもの育成を目指しています。

以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「豊かな人間性を身につけた子ども」に関して、平成27年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校6年生・中学校3年生）における児童生徒質問紙の回答状況を全国平均と比較したものです。

下のグラフから、本市の子どもの自己肯定感については、肯定回答（「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」）をした子どもの割合が、小学校では全国平均と同程度、中学校では全国よりやや高い傾向にあります。



また、「いじめを許さない」との問いに対し肯定回答した子どもの割合は、小・中学校とも全国とほぼ同じ傾向にあります。小学校と中学校の回答の傾向を比較すると、「いじめはどんな理由があってもいけない（当てはまる）」と回答する割合が、中学校において下がる傾向にあり、とりわけ、本市は全国と比較しても低い割合になっています。引き続き、いじめを絶対に許さない態度や行動力を育成していきます。



一方、「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか」との問いに対して、「当てはまる」と回答した割合は、小学校に比べ、中学校の方が高くなっています。



「将来の夢や目標を持っていますか」との問いに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもが、小学校で85.6%（全国平均86.5%）、中学校で70.0%（全国平均71.7%）となっており、小学校・中学校ともに全国平均よりやや低い結果となっています。

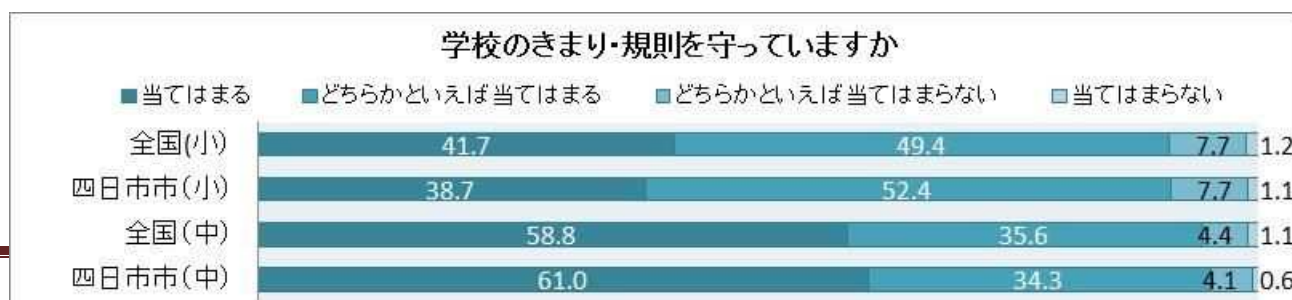


また、「ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがありますか」との問いに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもは、小中学校とも全国平均と同程度で、割合としては非常に高くなっています。



現在、市内の小中学校では、キャリア教育の視点で教育活動を整理した「キャリア教育に関する指導計画」に基づき、将来の社会的・職業的自立に必要な力を育てています。今後も、各校でのキャリア教育の取り組みを充実させるとともに、幼保小中が連携した一貫教育「学びの一体化」において、将来を見据えたキャリア教育を一層充実させていきます。

豊かな人間性を育む上で、規範意識を身に付けることは大切です。「学校のきまり・規則を守っているか」との問いに対し、肯定回答をした子どもの割合は、小学校で91.1%、中学校で95.3%となっており、全国平均と同様、非常に高いことがわかります。特に、中学校において「当てはまる」と回答した割合は高くなっており、発達段階に応じて、規範意識が定着していくことがわかります。



読書活動の充実も、豊かな心を育む大切な要素です。また、自然体験、社会体験、文化的な活動等に積極的に参加したり、それらの体験活動を通して達成感を持ったりすることも重要です。

下のグラフは、子どもの読書活動について尋ねた結果です。「読書は好きですか」の問いに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもの割合は、小学校で 73.3%（全国平均 72.8%）、中学校で 70.7%（全国平均 67.9%）であり、小中学校とも、全国平均よりやや高い結果となっています。



また、「学校の授業時間以外に、普段一日あたりどれくらいの時間、読書をしますか」の問いに対し、読書を1時間以上している子どもの割合は、小中学校とも全国平均と同程度ですが、「10～30分」と回答した割合は全国平均を上回っており、特に中学校において高くなっています。これらの結果から、小学校において8割程度、中学校においては7割程度の子どもに読書習慣が身に付いていることがわかります。

一方で、「全くしない」と回答した子どもも、小学校で20.9%、中学校では30.4%となっています。

本市では、「学校図書館いきいき推進事業」により図書館司書をすべての小中学校に配置しており、学校と図書館司書、図書館ボランティアとの協働を進めています。学校の授業における読書活動の充実に加え、家庭読書支援など多面的な活動支援により、多くの子どもたちが、日常的に読書に親しむことで、子どもたちの豊かな心を育てていきます。



4 健康・体力

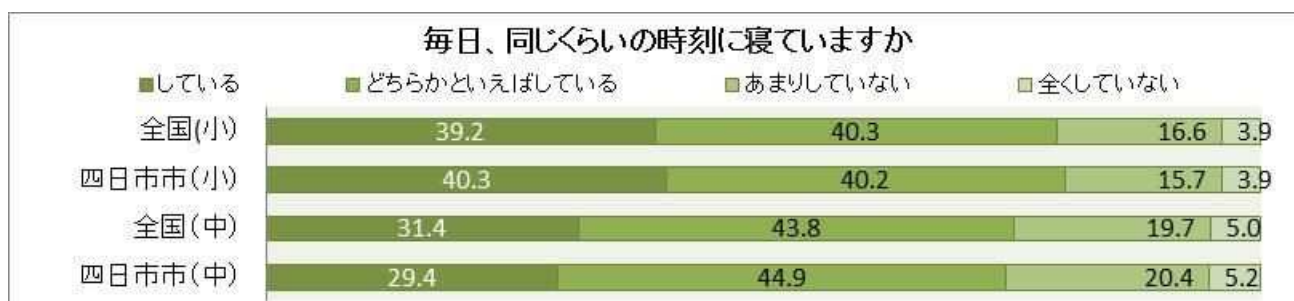
本市では、自他の健康や安全について実践していく力や、たくましく生きるための体力を備えた子どもの育成を目指しています。

以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「健康・体力」に関する質問に対して、平成27年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校6年生・中学校3年生）の回答状況を全国平均と比較したものです。

「朝食を毎日食べている」との問いに肯定回答した子どもの割合は、全国平均と同様の傾向となっており、小学校においては95.4%、中学校においては92.8%がほぼ毎日朝食を食べています。



また、子どもの起きる時刻・寝る時刻についても、全国と同様の傾向となっていますが、小中学校とも、寝る時刻が決まっていない子どもが2割程度います。



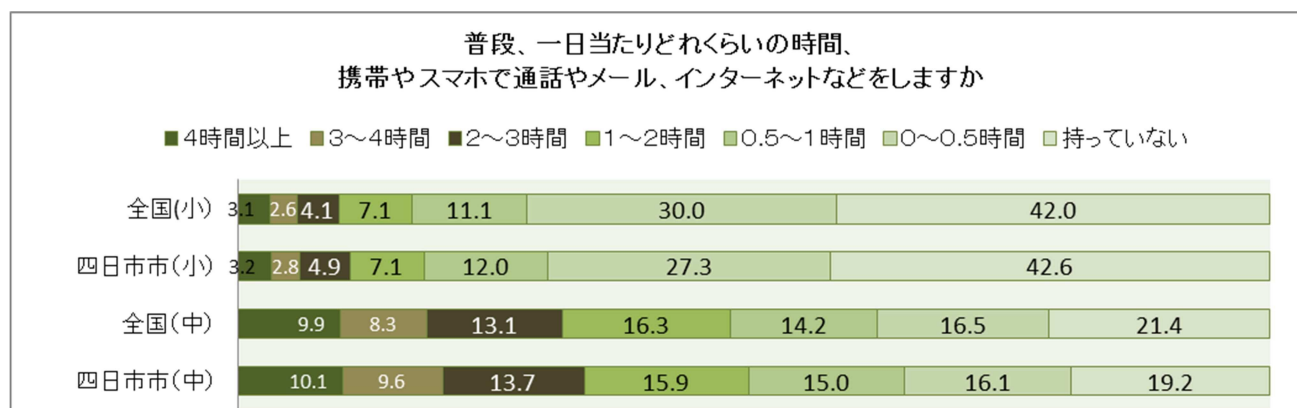
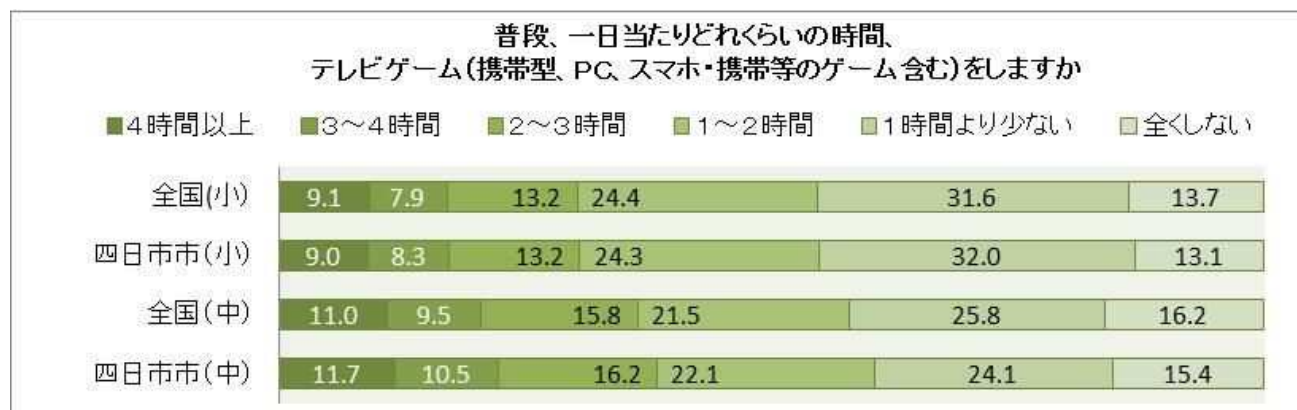
一方、子どもたちを取り巻くメディア環境も大きく変化しており、スマートフォン等の長時間使用による生活習慣の乱れなどが課題となっています。

下のグラフは、普段一日当たりどれくらいの時間をゲームやテレビ、スマートフォンなどに費やしているかを調査したものです。

テレビやビデオ・DVDを見ている時間については、全国平均とほぼ同様の分布となっていますが、テレビゲーム（携帯型、PC、スマホ・携帯等のゲームを含む）をしている時間については、1時間以上費やしている子どもの割合が、小中学校とも全国よりやや高くなっています。

また、スマートフォンや携帯を使用している時間については、小学生より中学生のほうが、圧倒的に長くなっています。とりわけ、本市の中学生の使用時間について見てみると、1時間以上使用している子どもの割合が49.3%（全国平均 47.6%）と、全国平均よりもかなり高くなっており、本市の特徴を顕著に表しているといえます。

本市では、携帯・スマホの使用に関するリーフレットを配布し、親子でルールづくりを行うよう啓発しています。今後は、家庭のルールづくりとともに、基本的な生活習慣の確立・改善を促すよう、家庭と協働した取り組みを一層進めていきます。



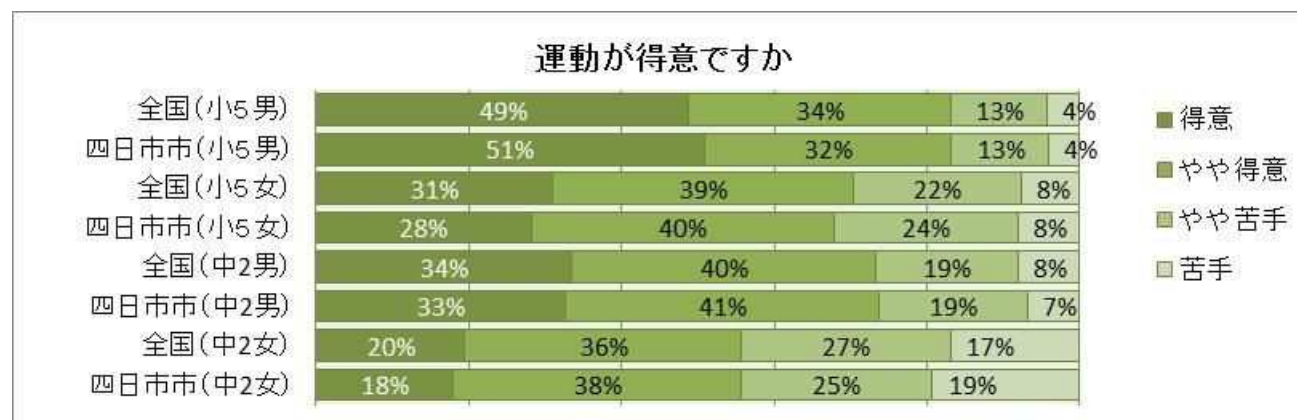
以下のグラフは、平成 27 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査（対象：小学校 5 年生・中学校 2 年生）の回答状況を全国平均と比較したものです。

「運動が好きですか」との問いに対し、「好き」「やや好き」と答えた子どもの割合は、ほぼ全国平均と同様の結果となっています。女子よりも男子のほうが、また、中学校よりも小学校のほうが、運動を好きと答える割合が高い傾向にあります。

学校では、課題（つきたい力）の提示や振り返り活動を取り入れた授業の工夫が進んでいます。今後も、子どもたちが自分の体力や運動能力が向上したと実感できるような取り組みを進めていきます。

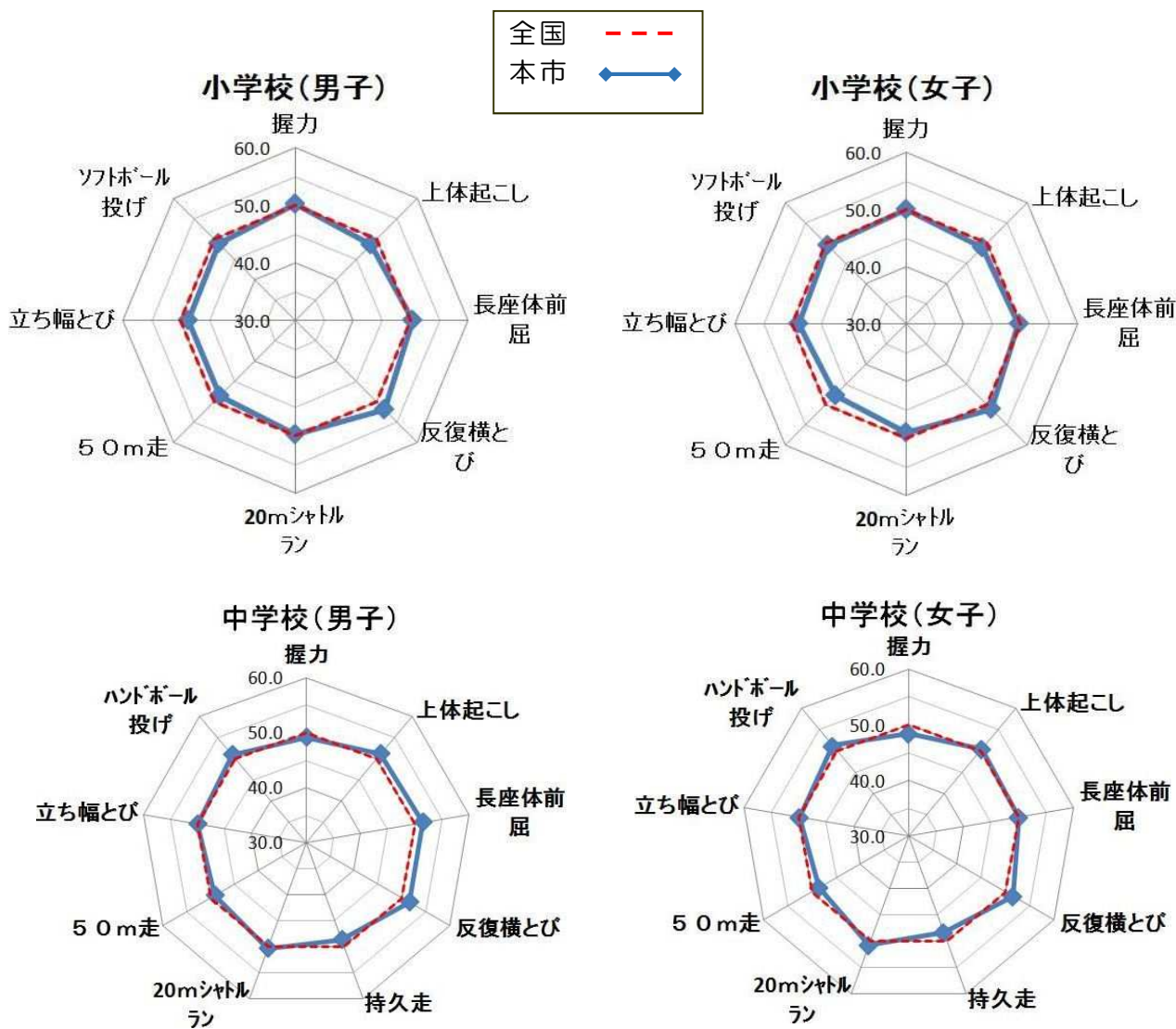


「運動は得意ですか」との問いに対して、「得意」「やや得意」と答えた子どもの割合は、小学校男子及び中学校男女では全国と同様の傾向が見られ、小学校女子では、全国よりやや低い傾向にあります。運動能力調査(調査対象：小5、中2)においては、中2男子を除くと、総合評価（5段階）で3段階以上の割合が、全国平均を下回っていることから（P. 84 参照）、授業における運動量の確保とともに、運動の質を高めるような取り組みが必要です。



体力について、実技種目において、全国平均値を 50 としてみた本市の平均値をみると、小学校男子・女子は全国平均よりやや低い傾向が見られました。中学校男子は

全国平均をやや上回り、中学校女子は全国平均と同程度でした。これらの結果から、さらに授業における運動量の確保や運動の質を高める取り組みを進め、日常的な運動習慣の定着につなげていくことが必要です。



5 豊かな人間関係をはぐくむためのコミュニケーション力

本市では、他者の意見を聞き、自分の思いを伝える力を身につけ、互いに尊重し、共に向上する人間関係を築くための資質を備えた子どもの育成を目指しています。

以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「豊かな人間関係をはぐくむためのコミュニケーション力」に関する質問に対して、平成 27 年度全国学力・学習状況調査における児童生徒質問紙の回答状況を全国平均と比較したものです。

「学校に行くのは楽しいと思いますか」との問いに対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した子どもが、小学校で 87.1 %（全国平均 87.0 %）、中学校で 83.7 %（全国平均 82.1 %）あり、小学校はほぼ全国平均と同程度、中学校においては全国平均よりやや高い結果となっています。



また、コミュニケーションに関する質問項目「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか」「友達に伝えたいことをうまく伝えることができますか」の問いに対しては、肯定回答の割合が、小学校で全国平均と同程度、中学校においては全国平均よりやや高くなっています。さらに、「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか」の問いに対しては、肯定回答の割合が小中学校ともに全国平均よりやや高い傾向にあり、いずれも 90%以上と非常に高くなっています。



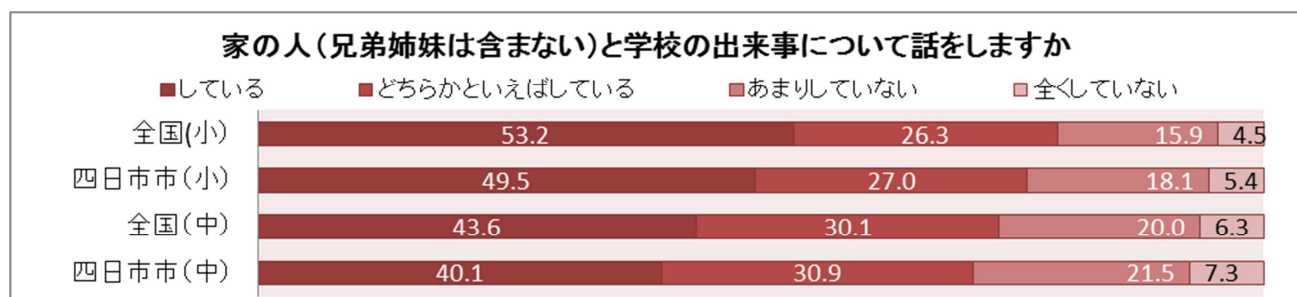
自分の思いを伝えることに自信を持ってない子どもはいるものの、他者の意見を聞こうとする気持ちが大変強いことがわかります。

学校に行くのは楽しいと答える子どもの割合も高いことから、今後も、子ども同士のかかわりを大切にしながら、互いに尊重し、共に向上する人間関係を築くための環境づくりを進めていくことが大切であると考えます。

子どものコミュニケーション力を育む上で、家庭や地域の人とかかわりは、重要な要素となります。家庭や地域における子どもの様子に関する質問項目では、以下のグラフのような結果となりました。

「家の人（兄弟姉妹は含まない）と学校の出来事について話しをしますか」との問いに対しては、「している」「どちらかといえばしている」と回答した子どもが、小学校で76.5%（全国平均79.5%）、中学校で71.0%（全国平均73.7%）であり、小中学校ともに、全国平均よりやや低い傾向にあります。

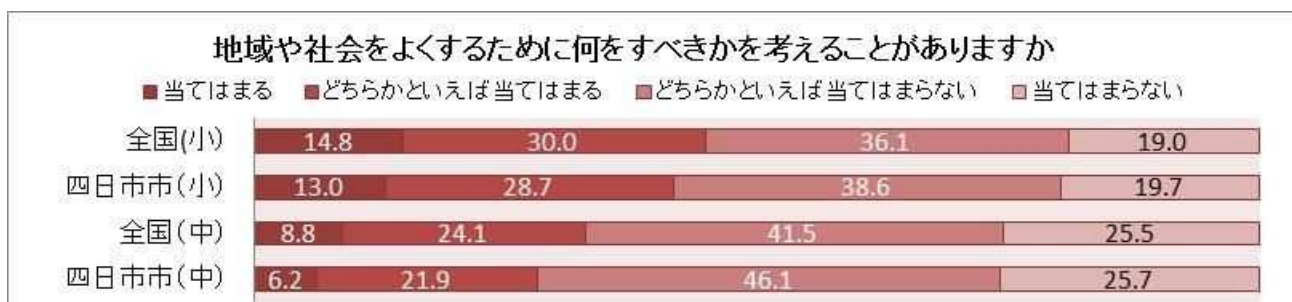
本市では、家庭での生活において携帯やスマホ等を使用している時間が長いという結果も出ています。家の人とのコミュニケーションを大切に、家庭生活における規則正しい生活習慣を身に付けることが求められます。



また、地域とのかかわりについて見てみると、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」との問いに対し、肯定回答をする子どもの割合は、全国平均より高い傾向にあり、子どもたちと地域とのつながりの深さが伺えます。



一方、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」との問いに対しては、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもが、小学校で41.7%（全国平均44.8%）、中学校で28.1%（全国平均32.9%）あり、小中学校ともに全国平均より低くなっています。



「新聞を読んでいますか」の問いに対しては、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもが、小学校で 24.6%（全国平均 23.7%）、中学校で 19.8%（全国平均 18.8%）と、小中学校ともに全国平均より高くなっています。しかし、学年が上がるにしたがって新聞を読まなくなる傾向や、半分以上の子どもが新聞を読んでいないという現状を改善する取り組みが求められます。



本市では、総合的な学習の時間などを活用して、地域の皆さんが講師となり、地域の文化や歴史を学習する機会を多く設けています。また、小学校においては、子どもたちが地域の行事などにかかわる場面も多く見られます。四日市版コミュニティスクールの指定校も増え、学校と地域が連携して子どもを育むための仕組みができつつあります。

このような活動を土台にして、子どもたちが地域社会の将来を見据えて学習したり、生活したりするなどの活動を通して、地域や社会のために何をすべきかを考えて活動できる人材の育成が期待されています。

さらに、学校における地域学習や地域での活動をきっかけにして、将来のまちづくりに貢献できる素地を養う取り組みへと広げていくことが大切だと考えます。